

1996年6月24日：北海道愛別町。まずはJR愛別駅方向にもどって、近くにみえる山すそを探索する。愛別町内自転車店で借用できたのはミニサイクルなのでなかなか距離が伸びないが、ぜいたくはいわない。右手には両側にカラマツ林が連なる平坦な林道が分岐しており、その少し左上は砂利の多い広場から黒い土の道が上り坂となって小高い森に入り込んでいる。ここでは蝶がいそうな森をめざして左の坂道を登ってみる。ひょうきんなクロヒカゲが汗をかいた腕にとまったりして出迎えてくれる。



1999年7月5日：知床半島。知床五湖は25年ほど前に幼い子供たちと訪れたときと同じような猛暑のなか第一湖をめざす。この日は第二湖までの散策だけが可能で、他の湖はヒグマが出没するという理由で踏み込みが禁止されている。散策路はおよそ2キロ。キツツキが穴をあけリスが棲みついたのではないかと思われる穴だらけの大きな枯れ木があったり、どれだけの時間をかけて雨だれが穿ったのか、あちこちを浸蝕された小岩が通路のど真ん中にあったり、あるいは路傍のクマザサで日光浴中のクロヒカゲが愛嬌たっぷりにアンテナを動かしているなど、短い探勝路も楽しみ方はいろいろ。

2008年8月18日：月夜沢林道。軽く腹を満たせるおにぎりとお茶のペットボトルをもって、チョウのたまり場と思われる上方の岩場まで行ってみることにする。新調した軽量ビデオカメラは福井方面に旅行に出た娘の純子家族に貸して、持ってきた重い方のビデオカメラは車に残して往復2時間以内にはもどるという目標で歩き始める。登山靴を準備していないため足裏に荒れた路面の岩角があたって痛い、無理のないテンポで上る。あたりに笹竹の繁る場所ではゴイシジミが薄ムラサキ色と白を交互にちらつかせるフラッシュ飛翔で目を楽しませてくれる。数が多くはないので新鮮な個体を2頭だけ採る。クロヒカゲとヒメキマダラヒカゲがやたらと多く、当方の身体にもまとわりつくように飛び交う。いずれも新鮮度は低くネットを振る対象ではない。ヒヨドリバナが咲く場所では、アサギマダラがただ1頭だけのんびりと蜜を吸っている。林道は何度もカーブしながら高度をあげて続くが目的地は遠い。やがて最初の防護壁がある部分にでるが、キベリタテハはいない。三度目の防護壁がカーブしながら続く場所で、待望のキベリタテハが現れて染み出し水のある部分に止まる。そこから数百メートルほど上った部分で、林道として30cm幅も残っていない大崩落現場を目の当たりにし、なぜ林道入口に車での侵入禁止警告看板があったのかを納得する。その崩落部のくぼみではクジャクチョウが1頭日向ぼっこを楽しんでいた。

2009年7月23日：入笠山。車をとめた広場にもどると、アザミの花でミドリヒョウモンの♀やギンボシヒョウモン、イチモンジセセリが蜜を吸っており、その様子をビデオで追う。雨露が乾いたクマザサの葉上には新鮮なクロヒカゲがとまっているので、翅表のビロード調の感じを撮りこもうとゆっくり迫るが、残念ながら裏面の眼状紋はみせてくれない。ごく普通種で近縁のヒカゲチョウよりは山地性の分布となるが、このチョウの新鮮個体裏面は眼状紋を包むようにブルーの鱗粉がちりばめられていてとても美しく、ヒカゲチョウにはそのようなブルー鱗粉はみられない。



July 17-18, 2016 ミヤマシロチョウ保全状況の視察に遠征

まだ日が昇らない時刻、ミヤマシロチョウの観察地へと向かう登山道沿いにもっとも個体数が多かったのがヒメキマダラヒカゲで、あちこちで開翅姿勢をとっていて、新鮮個体はとても美し



い。クロヒカゲも多く飛び交い、眼状紋まわりのブルーが美しい新鮮個体や、翅表全開あるいはV字開翅でひなたぼっこをする個体もみる。翌日の早朝からヤナギの樹液を吸いにやってきているクロヒカゲはシルエットとして記録してみる。